

答えのない音楽について意見を出し合い、 違いを認め合い、表現することを心から楽しむ

豊かな人生を送るには、自分らしく力を発揮していくことに加え、生活を楽しんでいくことも大事のように思います。そうした生きるうえでの総合的な力を、音楽とのふれあいを通して育もうとされている実践をご紹介します。

取材・文/松井大助
撮影/西山俊哉



音楽科
石井 舞先生

吹奏楽指導者コースのある音楽大学を卒業後、神奈川県の2校の高校で非常勤講師として2年間勤務。正規採用となつてからは、特別支援学校での4年間の勤務を経て、現在の茅ヶ崎高校に。音楽の授業を担当するほか、吹奏楽部と合唱部の顧問も務めている。

生徒に対する想い

自分を出すことを怖がらず
違いを認め合えるように

「音楽には答えがない」と石井先生は思っている。楽譜どおりに歌唱や演奏をする部分もあるが、音の強弱やリズムなどを自由に考えられる部分もたくさんある。その音楽をどう受け取るかも、個々の自由だ。

「悲しいときに聴きたい曲がみんな一緒かといえば、そうじゃないですね」

ところが、音楽は、答えがなく自由だからこそ、生徒はそれをどう感じ、どう表現したか、表に出すのを怖がるという。「授業で新しい曲を歌うのをすごく怖がるんです。これで合っているかな、って」

こんなふうに表現したらどうかと思っても内に秘めたままで、自分の意思を言葉にするのが苦手。LINEでスタンプを駆使し、曖昧さを残してやり取りするのは得意だが、対面で「私はこう思う」と言い合うことには慣れていない。

「みんなと同じではないと不安になるんです。私も高校生のときはそんな面があったかなあ、と思うのですが、もともと自分を出せるようになってほしい。『こうした』『私はこう思う』と言葉のキャッチボールをするなかで、お互いの考えや感性の違いに気付けたら素敵ですし、そのうえで自分と相手の違いを認め合ってくれるといいな、と。歌唱や演奏でも、意見を交

わして違いを認識し、そこをすり合わせていってこそ、よりよい音楽を表現できると思うので。そうしたコミュニケーションが求められるのは、音楽だけに限らないですね。社会に出れば、職場や地域にあんな人もこんな人もいるなかで、お互いを尊重し、どう力を合わせるか話し合わなければいけませんから」

違いを認め合うことは、石井先生が勤める茅ヶ崎高校でも大事にしているテーマだ。同校は2016年度に、神奈川県「インクルーシブ教育実践推進校」に。翌2017年度より、一般入試のほか、地域の連携中学校に在籍する知的障がいのある生徒の入学者選抜を開始、その選抜で入学した生徒が1クラスに3名程度は在籍するなかで、みんなで学び合う体制をスタートさせた。目指しているのは、障がいのあるなしにかかわらず、一人ひとりが自分を出すことを怖がらず、お互いに認め合いながら学んでいく学校だ。

とすれば、どんな授業にすればいいか。石井先生は「音楽をなるべくみんなが楽しむ」ことをベースにしたいという。

「生徒にもよく言うんです。うまく歌うことや、楽器を上手に演奏することが、私の授業のゴールではないよと。それ以上に、いろいろな音楽の楽しさを知って、一生音楽と付き合えるようになってほしい。学習指導要領でいうところの『音楽を愛好する心情を育む』ですね。そして音楽を楽しむと思うからこそ、おのおのが発信もしたくなって、お互いの違いに気付き、認め合っていく面白さも味わってほしいのです」

授業の実践

発言や表現の工夫を みんなで楽しんでいく

生徒が音楽を楽しみ、そのなかで自分も出せるよう、石井先生は4月より、さまざまな切り口で授業の場を温めていく。

机の並びは二列のコの字型。授業はその周りをぐるぐる歩いて、雑談をすることで、石井先生の話に反応し、生徒の誰かが疑問や感想をつぶやけば、それを拾ってさらに話を転がす。

「コの字の机を歩き回れば、どの生徒とも近距離で話せるので、そうしています。生徒には『よくしゃべる先生』と思われるのですが、実は雑談が苦手です。でも、雑談でもいいから生徒に発言してほしいんです。だから準備をして『しゃべろうとしている』のが本当のところですよ」



授業での雑談。家で飼い出したカメレオンの写真を生徒に見せて回りながら、「名前は〇〇で」「その由来はこうで」「こんなしぐさが可愛くて」と楽しそうに語る石井先生。



最初の授業で行うBIRTHDAYリズムアンサンブル。0～9の数字に異なるリズムが割り振られていて、生徒それぞれが自分の生年月日の数字を手拍子で表現し、音を重ねる。



リコーダーの全体練習でも、石井先生は生徒の机の周りを巡って一人ひとりの状況を確認する。机を二列にしてくっつけているので、隣や前後の生徒同士でも相談しやすい。

ループワークも行う。名前の順に5〜6人のグループに分かれて挑戦するのは、一人ひとりが異なるリズムで手拍子を合わせる、リズムアンサンブルだ。

「単にリズムを合わせるのではなく、『並び方を工夫したら音はどう変わる?』『手拍子に強弱をつけたら?』『何でもいいのかやってみよう!』と、工夫してみることも求めます。そうすると、背の順や誕生日順に並んでみたり、男女男女で並んでみたり、各自が体を上下させて列を動かしながら手を叩いたり、生徒たちからいろいろアイデアが出てくるんですよ」

全体歌唱では、毎回、生徒が聞き慣れた曲から歌い、「生徒をのせてから」難しい曲にチャレンジ。曲によってはグループに分かれて、歌詞への想いの込め方や、音の強弱などを自由に考えてもらう。

5月後半から取り組むリコーダーでは、全体練習のあと、こちらもグループ別の練習へ。グループごとにリーダーを決め、そのリーダーがテストを受けて合格した

ら他の生徒にもポイントを伝えるようにすることで、生徒同士で教え合うムードを高め、苦手な子のサポートを強化した。音楽鑑賞でもグループワークを積極的に行う。例年取り組むのが『動物の謝肉祭』の鑑賞。ライオン、亀、カンガルーなど動物をモチーフにした曲が続く組曲で、それぞれの曲の題名を伏せたうえで、今流れている曲は何の動物を表したものがグループで意見を出し合うのだ。

「この鑑賞では『さっきの曲はゾウだったね』というように正解があるといえませんが、曲の感じ方はやはり人によって違うんですよ。『僕はこう思った』『私はこう思った』といういろいろな意見が出て、めちゃくちゃ盛り上がります」

誰と何をどう演奏するか 生徒たち自身で考える

そうして音楽の表現や鑑賞をみんな楽しんでいくと、音楽について意見を出し合うことに、生徒も次第に慣れてくる。

そこで3学期はグループでの自由演奏に挑む。全授業を使い、最後の発表に向けて、全体の構想から練習まで、生徒が自分たちで話し合っ作品を仕上げるのだ。「メンバー構成も、楽曲も、使う楽器も、誰がどのパートをやるかも、全部自由です。何人かで演奏したあとピアノをソロで弾くなど、2回出てきません」

授業が始まると、生徒たちはグループごとに音楽室や音楽準備室に散らばり、話し合いや練習に入る。石井先生はといえば、「周りをうろろろして、意見を求められたときだけアドバイスします」。

「発表の日を迎えると、生徒は一生懸命演奏するのですが、正直このときは演奏の技術はそれほど見ていません。それよりも重視しているのは、発表に至るまでの過程です。音楽に向かう姿勢やチームワークはどうだったか。チームワークが良いと、結果的に演奏も間違いなく良くなるんですけれどね」

チームによっては、話し合いが難航したり、一部の生徒がボツとしたりすることもある。そんなとき、石井先生は見守ることに努めるそうだ。するとたいてい、生徒同士で壁を乗り越えていく。

「生徒たちは他教科の授業でもグループワークを結構やっているんで、このころにはもうそうした活動になじんでいるんです。だから自由演奏の授業が成り立つ、という側面はあるかもしれません。入学当初は重い腰がなかなか上がらない生徒もいますが、気持ちののってくれば、自分たちで走りだせる子どもたちなので」

■ 茅ヶ崎高校(神奈川県立)



School Data

普通科/1948年創立
生徒数(2018年度) 948人(男子448人・女子500人)
進路状況(2016年度実績)
大学200人・短大38人・専門学校/各種学校65人
就職10人・その他41人
〒253-0042 神奈川県茅ヶ崎市本村3丁目4番1号
TEL 0467-52-2225
URL <http://www.chigasaki-h.pen-kanagawa.ed.jp/>

Outline

教育方針は「民主的な社会の形成者として必要な資質の向上をはかり、心身共に健康な教養ある人物の育成につとめる」。2016年度に神奈川県「インクルーシブ教育実践推進校」に指定され、翌2017年度より、地域の中学校と連携し、その連携校に在籍する知的障がいのある生徒の入学者選抜を実施。障がいのあるなしにかかわらず、「すべての生徒にとって居心地のよい学校・学級づくり」を推進している。

**みんなで話して、意識し合っ
て音楽に取り組むのが楽しい**

—4月5月でどんな授業が印象に残っていますか？
 「グループに分かれて、手拍子で誕生日のリズムを取る授業です」
 「0から9まで、タタンとかそれがリズムが決まっています、自分の生年月日をそのリズムに当てはめて手を叩いて。それをグループで一緒にやるんです」
 「ほかのクラスのまだ話したことのない人ともやったりして、楽しかったです」
 —初対面の人と話すのは緊張しない？
 「緊張します。でもリズムでやることがあったから。せーの、で」
 —カラオケで歌うのと、授業で歌うのって、何か違います？
 「授業のほうが、なんか、むわーってくるものがあります」(体の中を何かが込み上げるような手ぶりを交えながら)
 「授業だとみんなでより意識するからじゃない？ 姿勢とか。歌い方とか」
 「カラオケと違ってほぼ地声だけで(どう表現するかを)やるしね」
 —中学校で受けた音楽の授業とは、変わったところがありますか？
 「全然違います。中学のときは、机もバラバラで横の人とも相談できなくて、先生からやってください、といわれたらやって。終わりです、といわれたら終わる感じでした」
 「石井先生はめっちゃ話しかけてくるしね。なんか笑いをとろうとしたり」
 「リズムとか音とか、わからなかったりしたらすぐ聞いたりできます」
 —これまで音楽が苦手だった人はいますか？
 「私は苦手でした。美術も書道も苦手だったので音楽にして。でも今の授業は楽しいです。みんなとできるからかな。話し合いとかグループワークが多いんです」



1年7組の皆さん

3学期の自由演奏。各チームの練習が佳境を迎えるころには、生徒同士で話し合う姿もだいぶ様になってくる。困っていないかと石井先生が声をかけても「自分たちでやるので」と袖にされたりする。女子が男子に「ごちゃんと言つてよ」と注文をつけたかと思えば、男子が「僕はこう思ったから」と反論することも。
 「そういう姿を見ると、君たち1年間がんばってきたね、と嬉しくなります」
 音楽の授業を2年次も選択した生徒はさらにパワーアップ。授業冒頭の雑談は

「教員なりたてのころは特別支援の研修を中心に受けていたので、音楽の教材研究がまだ足りないんです。生徒にはいろいろなジャンル・地域の音楽にふれさせたいし、ヴァイオリンや三線などいろいろな楽器も体験させたい。そのためには、まずは石井先生自身の課題もあるという。」
 「生徒は自分たちのペースで音楽の授業を受けている。ただ、授業中にその生徒だけ別の課題をさせたくはないんです。数学のように個別指導が効果的な教科もありですが、音楽は一人で行うより、みんなでやったほうが楽しいですから」

「生徒たちの発想に泣かされたこともあります。ある曲の最後のワンフレーズを、伴奏で誘導もしていないのに、みんながすごく優しく歌ったんです。なんて感性豊かな子たちだろう、って。音楽というのは、ふれてなくても受験や就職には困らないだろうけれど、ふれていけば生活がより楽しくなるものだと思うんです。おいしいものを食べたり、きれいなものを見たりしたときに感動するだけでなく、音楽にも心震わす人になって、人生をより豊かなものにしてほしいです」

生徒はこう変わる

**意見調整や創意工夫を
真剣に楽しむように**

にぎやかすぎるほどで、かと思えば歌唱や演奏のときはびっくりするほど真剣だ。課題がないわけではない。リコーダーの演奏では、今年度の1年生に全体練習についてこられず固まった生徒がいた。
 「授業の事前事後のフオーも考えなければと思いました。ただ、授業中にその生徒だけ別の課題をさせたくはないんです。数学のように個別指導が効果的な教科もありですが、音楽は一人で行うより、みんなでやったほうが楽しいですから」

私のなかに『興味をもつてやってみたらこんなに楽しいんだ』と思えるものを、もっと増やしたいです」
 その体感した音楽の楽しさを授業でも届けられれば、生徒たちの創意工夫しようとする意欲も一層高まると考えている。
 「生徒たちの発想に泣かされたこともあります。ある曲の最後のワンフレーズを、伴奏で誘導もしていないのに、みんながすごく優しく歌ったんです。なんて感性豊かな子たちだろう、って。音楽というのは、ふれてなくても受験や就職には困らないだろうけれど、ふれていけば生活がより楽しくなるものだと思うんです。おいしいものを食べたり、きれいなものを見たりしたときに感動するだけでなく、音楽にも心震わす人になって、人生をより豊かなものにしてほしいです」



思い描いている授業のあり方

目指す生徒像

- 思いを伝え合ってお互いの違いを認め合うことができ、協働が必要ならば意見調整をして力を合わせることもできる
- 生涯にわたり音楽と楽しく付き合うことができ、人生をより豊かなものにしていける

校内のインクルーシブ教育推進

- 共生社会について、生徒が自ら考え学ぶ機会(講演会や体験学習)の創出
- 組織的な授業改善(見てわかる支援の充実など)
- 生徒が特別な支援を必要とするときに利用できるリソースルームの設置

音楽の授業

他教科の授業の活動と結びつく体験

- 生徒同士で(音楽について)思ったことを伝え合い、違いを認め合う
- グループワークで(音楽を)どのように表現するか、自分たちで考え、意見を出し合い、一つの形にまとめていく

音楽の授業ならではの体験

- いろいろな音楽を表現することや鑑賞することの楽しさにふれる
- 音楽を一人ではなく、なるべくみんなと一緒に楽しむ

「みんなで音楽をやるのって楽しい」という感覚を生徒同士で活動するためのエネルギーにして